



おおあし

第3号

《 大芦小HP <https://oashi-e-konosu.edumap.jp/> 検索 》

小さい人に敬意を払う

何年前のことだったのでしょうか。普段担当していない低学年を私が見守ることとなり、事故や怪我があってからでは大変だからと、一生懸命自分の話を聞かせようとしていました。しかし放課後の時間、緊張の糸が途切れている低学年の児童を振り向かせるのはなかなか困難なことでした。そこへ助け船に現れたのは、私よりも若い先生でした。おもむろに自前のギターを持ち出し、美しい音色を響かせるとあっという間に子どもたちは静まりかえり、その視線を一挙に奪ったのです。教育者に求められる役割や能力の1つに、「役者」や「芸者」の力が挙げられることも耳にしますが、そのときの私は、自分の話や行動等が「魅せられないもの」であり、「興味をもたせ楽しませるもの」を示せなかったのだと、力不足だったなあと痛感させられた一件でした。

ところで先日、落語家の林家たい平氏の講演をいただける機会があり、その中で、NHK教育テレビの工作番組「できるかな」に出演していた高見のつぽさんが、去年9月に亡くなっていたことを知らされました。「できるかな」といえば、出演者であるノッポさんとゴン太くんが段ボールや廃物を使った工作をスタジオいっぱいに展開し、ナレーションが入るものの、出演者は全く言葉を発しないという斬新的な番組でした。私はこの番組の、高見のつぽさんの不思議な魅力にとりつかれていた一人でありました。改めて考えてみると、全国の「子ども」たちをテレビの前で熱中させてくれていた高見さんはプロの役者・芸者だったのだなと感じます。また、林家たい平氏は、高見さんは「子ども」のことを「子ども」とは決して呼ばず、敬意を払って「小さい人」と呼んでいたとも話されました。「小さい人」は、大人よりも賢くて心がきれいであり、大人も「大人ども」と言われるのはおかしいだろうという理由があるのだそうです。「子ども」たちは、大人たちの話は聞いて当然であるという考えをもっている「大人」の方々も多くいらっしゃることでしょう。相手が誰であれ、相手を敬うことで「小さい人」に限らず、自分の話に耳を傾けてくれることもあるということでしょうか。高見さんはさらに別の記事のインタビューの中で、昔の「小さい人」と今の「小さい人」との違いをこう述べられていました。

『(今の「小さい人」は)エゴイスティックで自分のことしか考えられない人が多くなりました。礼儀、思いやり、社会のルールなど、大人はそういったことを「小さい人」にしっかり教えないといけませんね。～中略～ 「小さい人」はいつでも親の振る舞いを見ているんです。しっかりとね。』(NEWS ポストセブン 2023.5.10 より)

だとすると、「小さい人」は担任の先生を、職員室や校長室の先生をよく観察して見ているのだと思います。身近にいる大人の振る舞いや行動は、確実に「小さい人」に伝わっていくことでしょう。

経験を重ねたとはいえ、私は「役者」「芸者」の力を存分に蓄えたわけではありません。そして「大人」としてもまだまだ勉強中なところもございます。毎月の全校朝会の話は「小さい人」に敬意を払い、興味をもたせ、魅せられる話にしようと意気込みます。

(校長 横尾 臣)